

原木しいたけにおける摘芽と収穫量との関係について

八島 武志・角 正明

I はじめに

本県の原木生しいたけ栽培においては、奥能登原木しいたけ活性化協議会が、傘の大きさ 8cm 以上、肉厚 3cm 以上、巻き込み 1cm 以上の物を特秀品とし、「のとてまり」のブランド名で専用の化粧箱に入れ出荷している。

「のとてまり」は種菌として菌興 115 号の形成菌を用いており、1 年ほどでは植菌孔から発生する。ところが、1 つの孔から複数の子実体が発生することがあり、しいたけ生産者の間では、そのまま成長させる方法のほか、摘芽を行って 1 つの植菌孔から発生する子実体を 1 つだけに抑制する手法もとられている。

本研究では、摘芽処理により子実体の収穫量に差が生じるかどうかを解明することを目的とする。

II 方法

2017 年 3 月に植菌し、同年 12 月に芽切りしたほだ木を 10 本供試した。同一の原木から芽切りしたもののうち摘芽したものと摘芽せずそのまま成長させたものとの、収穫時の重量を計測、比較した (図-1)。

III 結果と考察

摘芽処理を行ったものを行わなかったものの収穫量を表-1 に示す。収穫量は摘芽しなかったものの方が有意に大きかった (一元配置分散分析、 $\alpha=0.05$) また、収穫量を個数で除して、1 個あたり重量で同様に比較したところ有意な差は見られなかった (一元配置分散分析、 $\alpha=0.05$)。

他には、摘芽しないものは複数の子実体が合着したり、変形したりするのに対し、摘芽したものは傘がきれいな円形に成長した (図-2 および図-3)。

このことから、摘芽処理は子実体を大きくする効果は期待できないが、形状の良い子実体を収穫するには効果的な手法といえる。

一方で、発生した子実体に袋かけを行うことで複数個を収穫することが可能である。ただし、子実体が 3 つ以上ある場合は袋かけが難しく、作業中に芽を傷つけないよう注意が必要である。

IV 今後の問題点

今回の調査では摘芽しても子実体の大きさには影響が無いことが確認された。大きな子実体を収穫するためには植菌孔から発生する子実体を 1 つにさせる必要があるが、植菌孔における原基形成のメカニズムと制御手法については詳しく解明されていない。



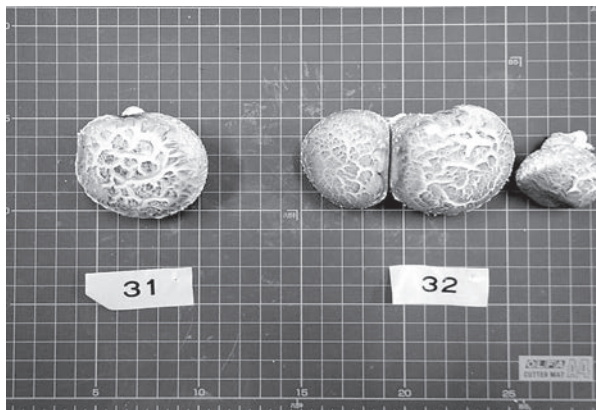
図-1 摘芽試験
左上 摘芽処理前、右上 摘芽処理後、左下 無処理



図-2 収穫時の子実体
左 摘芽処理、右 無処理
無処理のものは合着している。

表一 摘芽処理の有無と収穫量との比較

ほだ木	区分	収穫量(g)	個数	1個あたり重さ(g)
a	なし	30.6	2	15.3
	処理	13.7	1	13.7
b	なし	15.9	2	7.95
	処理	11.2	1	11.2
c	なし	72.9	3	24.3
	処理	30	1	30
d	なし	41.3	2	20.65
	処理	21.3	1	21.3
e	なし	54.9	3	18.3
	処理	20.9	1	20.9
f	なし	16.5	2	8.25
	処理	17.3	1	17.3
g	なし	58.5	2	29.25
	処理	27.9	1	27.9
h	なし	11.2	2	5.6
	処理	10.4	1	10.4
i	なし	41.1	3	13.7
	処理	20.8	1	20.8
j	なし	25.3	2	12.65
	処理	27.4	1	27.4



図一3 収穫時の子実体

左 摘芽処理、右 無処理

形状は摘芽したものの方が良いが収穫量は摘芽しないものの方が大きい。